

「ボウリングの日」特集

「日本ボウリング史の生き証人」白石雅俊NBF理事長に聞く
1972年のボウリング界

日本ボウリング場協会(BPAJ)が「ボウリングの日」を制定・施行したのは1972(昭和47)年6月22日のこと。当時のボウリング界といえば空前絶後のブームの最盛期。ボウリング場の数もプロの公式トーナメントの数も現在とはケタ違いで、表向き百花繚乱のにぎわいを見せていたが、業界内には深刻なトラブルや課題が山積し、四分五裂の様相を呈していた。同年11月には「明るく楽しいボウリング」を標榜したアマチュアボウラーの新団体NBF(日本ボウラーズ連盟)が誕生。初代理事長の故・山田嘉雄氏とともに同団体設立の中心メンバーだったのが、現理事長の白石雅俊氏だ。

黎明期のトップ選手

「ボウリングは神宮外苑の一等地から始まった、生まれも育ちもいいスポーツなんだよ」

これは白石氏が事あるごとに口にする「名語録」の一つ。氏にとっての「ボウリングの日」は、やはり東京・南青山に開場した日本初の民間ボウリング場・東京ボウリングセンター(TBC)で、ピンボーイとしてボウリング人生のキャリアをスタートした1952(昭和27)年12月20日ということになるのだろう。仕事の合間、センターが閑散としている時間に自身でもプレーするようになり、瞬間に腕を上げていったという。

「ボウリングというスポーツが、自分には合っていたんだろうね。当時はゲーム代が高額だったこともあって、お客さんの大半は外国人。米軍キャンプのアメリカ人がボクのことを可愛がってくれて、あちこちの基

地の試合に呼ばれて投げに行きたよ」

翌53年2月には早くも初のボウリング選手権が讀賣新聞社主催で開催され、白石氏もわずか10名の日本人選手の一人として出場(大半はアメリカ人選手だった)。55年11月に開催された初の国際大会(第1回BCトーナメント)では日本人最高位の5位入賞を果たし、57年7月には来日したアメリカの強豪・パドワイザーチームと対戦する日本選抜チームの一員に名を連ねるなど、ボウリング黎明期のトップ選手でもあったのだ。

一方で年々急増していったボウラーの組織作りにも尽力。62年の東京都ボウラーズ連盟(全日本ボウリング協会=JBCの前身)、67年の日本プロボウリング協会(JPBA)設立に際しても中心的役割を担った。それより前、白石氏は56年にTBCを退職して報知新聞社に入社。広告営業マンとして業界外にも数

多くの人脈を得たことが、そうした活躍の背景にはある。

NBF発足の時代背景

ボウリングブーム真っ只中の72年、JPBAの公式トーナメントは男女計156、賞金総額は2億円超に到達。その前年には女子1期生の並木恵美子プロが年間17勝を挙げて獲得賞金1000万円を突破し、社会的にも大きなニュースとなった。

テレビのボウリング番組も花盛りで、民放各局が競うようにレギュラー番組を放映。その数は週2ケタを超え、専属解説者や出演プロの争奪戦は熾烈を極めた。だが、視聴率対策としてスポーツ性を大きく逸脱した演出の番組も制作されるようになり、ボウリングのイメージは徐々に損なわれていく。

BPAJも全国規模で急増するセンターの統括に苦慮していた。71年9月にはJBCとともに公正取引委員会から独占禁止法違反の嫌疑で強制調査を受け、同年暮れには東京都が娯楽施設利用税の引き上げを決定(他府県も追随)。この時期は半数以上のセンターが協会非加盟で、顧客確保の過当競争が、高額商品の提供や「だれでも簡単にハイスコアが打てる」トリックレーン問題を派生させるなど、難問が山積していた。

そんな八方ふさがりの状況のなか、BPAJはスポーツボウリングを掲げ、そのお墨付きとして体協加盟を急ぐJBCとも対立。水面下で新たなボウラー団体設立に動き出す。無論、白石

▲左は6月18日の取材時、右は22日の中山プロ50周年記念パーティー出席時の白石氏。今秋には米寿を迎えるが、まだまだ元気一杯だ



▲2017年12月、日本プロスポーツ大賞表彰式での記念撮影。隣は新人賞受賞の久保田彩花プロ(48期)

氏はその渦中にいた。

「JBCは、体協に加盟するために組織を身ぎれいにする必要があったんだよね。プロアマの交流禁止などは表向きの方便として決めたことだけど、諸々の厳しい規則に反発して『もっと楽しく投げたい』という人たちも多かった。ボク自身が大勢で楽しくボウリングをしたいほうだったから、場協会のバックアップを受けて山田さんとNBFを作ったんです。結果的にJBCからは除名されたけど、本気でけんか別れしたわけじゃない。当時のJBCの仲間とは、昔も今も交流があるしね」

NBF発足の前後からボウリングブームは急速にしぼみ、業界も縮小の一途をたどっていくが、74年に報知新聞を退社し、独立して広告代理店を立ち上げた白石氏は、新たに獲得したスポンサーをボウリング界にもつなぎ、懸命に底支えしていった。

4年前にJBCの50周年記念パーティーで、2年前には日本プロスポーツ大賞で、それぞれ功労賞表彰を受けたことが、立

場が変わっても私心なき業界貢献を続けてきた、何よりの証左だろう。

「驚いたけど、本当にうれしかったよね。でも、これからはもう、ボクなんかの出る幕があっちゃんかいないと思う。もっと若い人たちが前面に立って業界を引っ張ってほしいね。プロスポーツ大賞の表彰式で感じたことだけど、プロ協会も日本プロスポーツ協会の会員なんだから、もっと積極的に他競技の選手や関係者と交流して、視野を広げていくべき。他のスポーツ界は国際標準で動いているのに、ボウリングだけ後ろ向きでいたら、この先業界は小さくなる一方だと思うよ」

ボウリング人生67年。これまで、陰に日なたに業界を支え続けてきた「日本ボウリング史の生き証人」の、心からの忠告だ。

「ボウリングが培ってくれたものと、大勢の人たちとの出会いが、ボクの財産。同じような気持ちで、この業界にいる一人ひとりが大事にしてもらいたいと思います」



▲53年2月、日本初のボウリング選手権出場時の白石氏(後列中央)